

四年目

二月

○日

ここ二、三か月、門限を守る寮生には、トイレ掃除が回って来ない。

寮則の中の、仕事以外で十一時を過ぎるとトイレ掃除二回という罰則に引っかかるのが、十二月初めからの忘年会、クリスマス・パーティで続出したからだ。一人で何回も、という猛者がいる。そしてその罰を終えるのさえ順番待ちのところへ、スキーに出かけ、大抵帰る時間がずれるから、また志願者(?)が増えるのだ。

飲んだ組は、酒の勢いで気が大きくなって「トイレ掃除くらい、やればいいのでしょ」とゆうゆうと遅れ、さめたら後悔しているらしい。でもこれは文句は言えない。スキー組は、車が渋滞や雪のために動かないのが原因であると甘受できないらしい。「まけていただけませんか」とやって来る。帰りたくても不可抗力なのだからと強調してねばる。

私もかわいそうな気はするが、情にほだされてまけていたら切りがないから「みんなで決めた規則なのだから、寮会を開いてみんなと相談すれば？」と逃げたり「どうせ順番が回って来るのだから、罰だと思わずに当番と思えばいいでしょ」となだめたりしている。

A子が「終りました」と言いに来て、ぼやいた。「当番でやっている時は、みんな何も言わないで通り過ぎるのに、罰でやっているのと、ウヒヒご苦労さまでーす」と大声で言うんですよ」私は「悔しかったら早く帰りなさいよ。でも笑った人もいずれやることになるだろうから、お返しのカキマスはあるわ」と言ったが、これはよいことを聞いた、これからは私も行って、わざとらしく「ご苦労さまでーす」と言うてやろう。

しかし、それで門限破りが減るかどうか。

○日

寮生にボーイフレンドができると、聞かなくてもすぐに判る。なぜなら、物忘れがひどくて（それとも聞こえないのか）何か頼んでも一向に行動せず、後片付けも放つたらかし、表情も虚ろとなるからである。

恋をすれば、生き生きとして頭のめぐりもよくなるかと思うのに、反対で、その症状はみんなに共通する。

N子なんか食事中に電話がかかり、長電話の後、そのまま部屋に帰ってしまったて、テーブルに食べ主の現れないお皿がいつまでも残っていた。H子は部屋の電気をつけたまま、スリッパも脱いだまま外出したので、ちよつとそこまで買い物にでも行ったのだろうと思っていたら、ちゃんと会社に出ていた。Y子にも私は言った。「心ここにあらずね、どこにあるの」

頭に許容量があつて、男のことで一杯になると、他のことは押し出されてしまうのだろうか。私の経験(??)では、余裕ができて物がよく見えた、と思うのだけれど。でもみんなは違っているのだから、車にはねられたりしなければよいが、と心配になる。

○日

いつか総務部から、何でもいいから改善したいことがあれば提案してくださいという印刷物が来ていたが、私から言うこともないしと放っておいたらM氏から電話がかかって、私が出せば総務部は百パーセントの提案率になるから必ず出してください、

とのこと。そこで私は

『寮の門の開閉装置について

寮の通用門、玄関は、午前七時四十分から十一時三十分（店売遅番の出る時刻）までと、午後六時四十分から十時五分（同じく帰る時刻）まで開いています。その開いている間の、特に夜、私達がチカンと称している男が入って来て、お風呂の窓の下にいたり、食堂の外側を通ったりして、ギョツとさせられることが度々あります。

「何かご用ですか」と声をかけることによって、またはもちろん何も見えはしないのだから、諦めて出て行きますが、やはり怖いし、正体不明の男に出入りされるのは困るのです。そこで、前もつて寮生の声か、声紋を登録して、「行つてきます」「ただいま」の声をかけたら開く装置があれば、痴漢の侵入防止と、寮生に挨拶の習慣がついて一石二鳥なのですが……』

と書いて出した。

はじめは、どうせ率を満たすだけのものという軽い気持ちだったけれど、いやひよつとして真面目に考えてくれはるかも知れん、という期待に変わって待っていた。

しばらくして評価がついて返って来た。

「次の理由で不採用とします

費用対効果の面から実施できない」

点数は五段階評価で、効果2、応用度2、独創性1、努力度2。百点満点で三十六点。選外。であった。

○日

現在寮生は十九人いるが、噂によると、七月までに六人が結婚や独立で寮を出るらしい。新人は今年入るとしても一人の予定である。会社が地方出身者を採用しない方針で、去年から減っているのだ。

残っている寮生も次々と結婚適齢期なるものを迎えるし、一人でアパートで暮らしたくなるかも知れない。何だか私のクビのあたり、すうすうしてきた。みんなに「いつまでも居てよ」と言っているのだけれど、何人までなら寮はあるのだろう。一度K氏に聞かなくては。

○日

駅前の魚屋さんで、いい舌平目を見つけたので買ってきた。ブロッコリーとじゃがいもを付け合わせにしてムニエルにして食べよう、という魂胆。

大したお料理ではないけれど、寮のメニューと比べると、材料費は五倍くらい、料理する時の気の入れ方は二倍くらいで、これだけでも豪華版、それに都ホテルのコンソメスープの缶をあけて……、とたまに私がいい気持ちになったら、空から雨どころか雪が落ちて来た。

三月

○日

シクラメンが咲き誇っている。最後の五輪になって広い場所があるからか、大きく花びらを広げ、なかなか衰えを見せない。そのうちの二輪はもう一か月以上咲いている。さすがに色は少しあせてはいるが、他の三輪に負けずにしゃんと立っている。花屋が咲かせた、はじめの時よりも華やかである。

切花もよく長もちさせるね、と人に言われるけれど、花の方が勝手に長生きしてくれるのだ。去年の薔薇は最後の一本が首を垂れたのは一か月後であった。この時は新記録かもしれない、と二十六日目から写真に撮った。息子が誕生日にくれたのだけれど「まだあるの、こうなるとあげがいがあるね」と言っていた。

私の手入れは知れたもので、丹精をこめているとは絶対に言えない。だとすると、ひよっとして、花たちはタバコが好きなのではないだろうか。タバコを吸わせるわけ

はないが、私のタバコの煙を吸って長生きしているのではないだろうか。

などと言つて最近、嫌煙権に押しまくられて、いじけているもんだから、花を相手に無理やり仲間意識を植え付けようというわけである。

○日

大学卒の新入社員が五人入寮した。このうちの三人は研修期間が終われば東京に行くことになつてゐるが、歓迎と顔つなぎの寮会を開く。

W子に「今日はだらけの活入れではないからお菓子付きにしようか。好きなもの買っていらつしゃい」とお金を渡した。W子はB子を誘い、近くのローソンまで走つて行ったが、やがて大きな袋を四つも抱えて帰つて来た。一人の予算は二百円なのにどうなつてゐるのか、とお菓子のことには詳しくない私には何が出て来るのか興味があつた。私なら単純にケーキ一個ぐらいしか思いつかない。

袋から出て来たものは、オバQポテトチップス二十八グラム入り、ビツクリマンシール付きチョコレート、ミルクバー、源氏パイ、梅の香巻きおかき、であつた。私にしたら、オーバーに言えば、こういう世界もあるのか、という感じである。

それを分けるのに大騒ぎで、オバQの絵の、こつちが可愛いとか、ミルクが懐か

しいとか、W子の、いかにしてお金を有効に使うか（残りは八円）の苦心談もあり、みんな普段の顔つきと違っている。二十を過ぎたといっても、まだまだ無邪気なものであった。

私も一人前ももらった。今まで、細かく包んであるのは過剰包装だと思っていたが、こういう場合はそのまま分けられて便利である。お菓子屋さんもいろいろ考えてはるんやね、と私はオバQに言った。

四月

○日

新入生の、東京から出した荷物が、本人が到着したのに着いていない。寮の客用の布団を貸したが風邪をひいてしまった。私は池田の配送所に何度も電話をかけ、彼女の母親も東京の運送屋をせっついたが、行方不明とのことであった。私の所に東京から電話がかかったのでどうしてこんなことになるのかと責めたら、期日指定の荷物があり、コンテナに入っているから開けていない、ひよつとして間違つてその中に入っているのかも知れない、との言いわけであった。でもその中也調べてほしいと言ったら、全国に手配したがもうちよつと待つて、と言う。その時既に、荷物を出してから十日が経っていた。

しかし新入生が会社でそのことを言ったら、その夜に荷物が届いた。そして私はその日総務部から注意を受けた。

「荷物の心配などは寮母のすることではない、初めから我々に任せてもらえれば……」一発だとは言わなかったけれど、どうやら逆差別を受けられるらしい。今度のこと、会社からの申し入れがてきめんに効いたのか、あのままのやり方で見つかったのかは判らないが、東京の母親や私、つまり一般の人間があれだけうるさく文句を言ってもらちのあかなかつたものが、M社、と一言言えばすつと道が開けるといふのはどういうことだろう。大口の取引きがあるとしても、小口だつてお客である。その腹立ちと、私がやらなくてもいいのだと言われたのが心に残った。何も手を打たず怠けていた、と叱られるのなら納得できるのに。いやしかし、新入生が来た日に荷物が届いていない、とその日に会社に言わなかったのは怠けていたことになるのかしら。

○日

梅が咲いて、桃が咲いて、桜が咲いた。他の草も木も春になれば目を覚まして華やかになる。私は春になったとたん、内にこもってしまった。どうにもならない事を延々と考えていて、その自分がまたいやになる。

Rさんにぐちぐち言っていたら「去年も同じ服を着て同じようなことを言うてたよ」と言われた。そう言えば去年、寮母日記を休んで、頭がおかしいと書いた覚えが

ある。それまでは移り変わる季節を楽しみ、良くないことがあっても私流のやり方であまくかわし、ウツの状態になることはなかった。知り合いの精神科の先生にも「あなたは考え方に柔軟性があるから、私とは縁がありませんね」と言われたことがある。そして逆に人のウツを治す名人であったのだ。考えこんで苦しんでいる人に「こう思えば?」「どうしようもないことを考えても時間の無駄でしょ」とか割と根気よくつき合つて「おかげさんで」と複数の人から言つてもらつた。今や当時のその人達の気分はよく解るけれど、そして人に言つた通り自分にも言つてるけれど、すつきりしていない。

○日

今日は謀反を強行する。寮生が珍しく早く全員出払つたから、大急ぎで夕食の下ごしらえをし、食材は外のボイラー室に入れてくれるよう、門に札を下げて梅田に出た。目的は映画観賞『愛と哀しみの果て』。

「二人ぼつちの時にはわざと昔のにぎやかに過ごした時を思い出して、とことん孤独になれば耐えられる」とヒロインは言つていた。私は孤独には耐えられても、この、二十四時間拘束され、休みは二十日に一回というのに段々耐え難くなつてきている。

外に出ることはあるけれど、禁を犯しているのだから落ち着かない。

今日はもう頭がいかれていいるから、どうなってもシラン、と暴挙に出た。幸い留守中に何事もなかったようである。

二十四日

月食のためハレー彗星が見える最後のチャンスとて、五月山の日の丸展望台まで行く。「私は夜遊びに行きますから、連絡事があれば寮長にしてください」と放送して行った。寮長のW子にはハレーを見に行くと言った。

展望台には望遠カメラを備え付けている人あり、小学生達は月食の記録を取るという理由で外出を許されたのだろうが、観測はそっこのけで騒ぎ回っていた。

私は八倍の双眼鏡だから、はじめから彗星が見えるのは期待していなかったが、あれだ！と言う人がいて、それらしき星を見て（実は違っていたのだが）他の星や街の灯のきらめきを眺めて帰って来た。

五月山公園は山桜の季節であった。思えば今日は父の命日。父の植えた山桜も、今は兄の住む家で咲いているだろう。

寮に帰れば、私が彗星を見に行ったことは知れ渡っていて、会えば「見えまして

か？」と聞かれる。ドライな若い娘達には不思議な行動らしい。

「次に巡って来る時には、あなた達は見られるかも知れないけど私は死んでいるしね」

「おばさん、それはないよ、美人薄命というでしょう。私なんかとつくに死んでます」

「あら、そうでしたか、失礼致しました」

五月

○日

連休というこの厄介なもの。私の休みは二十日に一回の割にしかないから、みんなが休んだとと一緒に休んでいられない。もつとも、店に勤務する寮生は忙しくて休めず、前後に代休を取るが、だから私の仕事もあるというわけだけれど、やっぱり人並みがいい。

しかし、おこぼれは頂戴できた。食事は希望者が三人以下になれば作らない、ということに寮母代々なっているので私も踏襲する。お風呂も六人くらいなら、お湯は沸かすけれど、湯船には張らずシャワーだけとなる。寮生が何か言ってくるのも人数が減れば減るし、電話のかかるのも減る。

と、こうは言っているけれども、あんまり仕事がないのも落ち着かないもので、普段手を抜いている所の大掃除や、草取り、溝掃除をすることになる。そう言えばお正月も掃

除に専念した。お盆も同じ。かくてこの寮は大型連休の時にきれいになる。人並みがいいと文句を言いながら、私もよく働くではないか。

○日

寮生の退寮が続き、一人部屋が増え、近く退寮予定の寮生もいるので、部屋替えをすることにした。一人にならないよう退寮予定者を同室にし、一、二、三階同人数になるよう、今までと同じ顔合わせにならないよう、そしてもう一つ「あの人と一緒にやるのやったら出て行く」というのも受け入れ、空いたあとあとへ引越す順番も考えて部屋割りをしなければならぬ。

以前は、新入生が多かったから、その人数だけ旧寮生が他の寮へ出て行き、各部屋新旧二人ずつとなる、この組み合わせは総務部が決めていた。しかし、相性もあつて替えた方がいいことがある。K氏は「勤務地が同じでかわりばえがしないからというのはともかく、感情で替えてはいけない」と言われるが、私は、仕事を離れてほっとしたいのに気が休まらないのはかわいそうに思うから、なるべくなら仲良し同士を一緒にしてやりたい。

幸いここしばらく新入生が少なかつたり、いなかつたりして、総務からの割り当て

は少ないので、こちらで適当にやれるようになった。

でもいくらそれぞれがいいように、といっても「あの人はいや」と敬遠される“あの”のことも考えなくてはならない。双方うまくおさまる方法はないものか。

寮長、副寮長の意見も聞いてみたが、これはあつさり解決した。十八人を二、三階に分ければ必然的に各階一つずつの一人部屋ができる。この部屋を割り当てられた“あの”も、敬遠されたのではなく奇数のせいだと思えばいいわけだ。

こうして、退寮予定者が出れば、暑くて寒い各階端の部屋は空き部屋となり、抜けた所はなくて無駄は省け、けんかをしなくてよい部屋割りが決定した。内緒だけれど、私自身の感情も少しは入っている。それを隠す効果のほどは判らないが、部屋割りをワープロで打って張り出した。異議を唱える寮生は今のところ一人もいない。

○日

オフ・シーズンながら、私はカルタ取り（百人一首）の練習をしている。今年のコーラスOBの新年会でしてから一念発起、来年を目指して覚えようというわけである。かつての現役の頃、みんなで歌うことと、遊ぶことが同じくらいの比率でよく集まった。カルタ取りは銀紙で作った優勝カップがかかっていた。しかしベテランは沢山い

て、私は中の下くらいだからカップは触ったことがない。

今年久しぶりにした時、そのベテラン達も年のせいでアツという間に持っていないかなくなっていることと、五枚ほど残った時に、読み手が珍しく作者の名前を読み上げたら私の知っているのがあり、その札をつまみながら「はじめから作者名を言うてくれたらもつと取れたのに」とほざいた手前もあつて、帰るなり、三つ覚えて二つ忘れしても一年後にはかなり残っているのではないだろうか、とやり出したのだ。アンチヨコを何種類も作り、息子の高校の副読本で背景や解釈も読んだ。

前の×が○に変る代わり、○が×になったりしてやっぱり三進二退である。そしてしばらく全く見ない期間をおいておく。いうなれば、忘れる期間。これが不思議なことに楽しい気分なのだ。どれだけ覚えてるか、ではなくて「どれだけ忘れてるかな」と試す前はわくわくする。やり出せばひっきりなしに「あほ！」と自分をののしっているのだけれど。とにかく来年のカルタ取りでは何枚取れるだろうか。

六月 出雲旅行記

出雲へちよつと変つた旅をした。

私は生まれる直前に大阪へ来て、生まれてすぐに松江へ行き、三つの時にまた大阪へ帰つたらしい(記憶はない)。父母は大正九年から昭和六年ごろまで奥出雲にいて、姉や兄はそこで生まれた。父が亡くなつたあとで未完の自叙伝が出てきたこともあり、古いアルバムを見て一度は行つてみたいと思つていた。

奥出雲の中でも父の仕事の関係で住所は度々変つている。アルバムには住んだ所だけでなく、祖父母や叔母と一緒に遊びに行った日御碕や出雲大社、その他鉄道や乗合自動車の開通式、宴会の記念写真などたくさんある。父はよく働く人であつたけれど、またよく遊んでいたらしい。旅館で宴会をし、その旅館主も一緒に他の所へ出かけ、別の旅館主も仲良く写真におさまっている。とにかく旅館がやたら出てくる。そして何度も見て写真を照らし合わせると、いろんな人の名前が判つてき、父の大の仲良し

の人はこの人だったのだと判る。

父母も祖父もなつかしい。私が一緒にいなかったのは致し方のないことだから、今から行って、古い写真と同じ所に立ってみよう、と決めた。写真説明に足りない所もあり、叔母に当時の事を思い出してもらって予備知識を仕入れた。叔母は六十年前の事を、写真を見て「この着物はこんな色だね」と言うようによく覚えていた。

それから、もしやと思つて現在の観光旅館名簿を調べたら一つだけ同じ名の旅館があった。果たして昔から続いているものだろうか。とにかく出かけることにする。以前そのあたりにいたことのある仲良しと一緒に往つてもらえることになった。

出雲空港に着いてまず目指すは日御碕。灯台は明治三十六年に初点灯された時のまゝ。門柱は變つていた。門柱の標札は、昔は「日ノ岬燈臺」現在は「出雲日御碕燈台」である。ここでは母が左側の門柱の横に写っているから、私もそこに立たなければならぬ。祖父、叔母の、島根半島をバックにした展望台にいる写真がみんなやつれて見えるのはなぜか、今よくわかった。百六十三のらせん階段を登らなくてはならなかったからだ。七階建ての高さである。「ほんとにしんどかったね、おばあちゃん」六十年たつて、人は死んでも景色はそのままであつた。地球の寿命からすれば變るはずはないだらうけれど。

出雲大社前の、ただ一つ名簿にあった「とらや」は、やはり昔からの旅館であった。若い奥さんに古い写真を見せると、中に写っている女の人が、亡くなったおばあさんに似ていると言う。そして一部屋だけ昔のままにおいてあるとのことであった。私は見せてもらいたかったけれど、それだけのことで迷惑だろうと、奥をすかし見るだけにした。

八重垣旅館は写真館になっていて、出雲大社参拝記念の写真をとるらしく、それ用の日付入りのパネルが置いてあった。屋号は変わらず、八重垣である。私は参拝記念でなく、八重垣に出会った記念写真をとる。

大社教前の、ぎぼしのついたタイコ橋、これには赤ちゃんの姉も写っている。今、そのあたりのぎぼしのついた橋は石橋で丸みもゆるいが、これしかない。

姉が一年生の二学期間だけ通ったという松江の白潟小学校は宍道湖のほとりにあって、今年創立百十三年を迎える学校であった。校舎は建て替えられたであろうけれど、姉のために写真をとり、鉄棒でさかあがりをしてきた。嫁が島の向こうに夕日がゆっくり沈むのにつき合ひ、一日が終る。

奥出雲の訪問地は、国鉄木次線上の大東、木次、下久野、八代、三成の予定であるが、へき地のことで、一日に数本しか電車は通らないから、下りて見てまわり、次の

に乗って見てということとは不可能である。それでタクシーでまわることにした。

運転手さんは、私の息子くらいの人だけれど、よく気がついて、また私の古写真をもとに尋ね歩くのをおもしろがって、町へ入れれば郵便局などに聞きに入り、タクシー無線で聞いてくれる。しかし彼に言わせると、小さい町ばかりだから、このことはすぐ町中に知れ渡るだろうとのこと。

兄の生まれた八代の町で、まずとびこんだのが西村家具店。大社前の例もあり、西村旅館が家具店になっているかもしれないのだ。この私の推測ははずれた。がしかし、そこから糸がほぐれた。西村旅館は人が変って魚屋に、魚屋のおかみさんは年寄夫婦のいる家を教えてくれた。そこへ行ったら「宮川さんを知っている」と言う。でももつとよく知ってる人に聞きなさいと。そうやってとうとう元いた家が判った。ここで父は貸自動車屋を営んでいたのだった。古い写真には父の字の「高級優美 親切丁寧 宮川自動車部」の看板が上がっている。今は、八代町公会堂となっていた。

次に下久野トンネルを探しに行く。このトンネルは、当時日本で二番目に長いもので、この鉄道工事に宮川自動車のトラックが従事していたのだ。

しかしなかなかトンネル口が見えない。人に聞いたら違う所へ出た。むりもない。タクシーに乗ってトンネルは？と聞けば、自動車道のトンネルを思うだろう。ほかに

誰が何のために鉄道のトンネル口を見たがるものか。けれどさつき、柿色の一両の電車の通るのが見えた。この近くであるに違いない。

運転手さんがようやく線路を見つけた。それはトンネルへ入る前に山かけに入り、下ってトンネル口に至るのであった。車はもう入らない。私のがけにかかっている工事用のハシゴを下りることにした。電車の来る心配はない。何しろさつき通ったばかり、少なくとも一時間は来やしない。線路に立って、手前からトンネル口を写すだけ、と思ったのが、口まで行ってしまつて、中まで写してきた。

立ち止まれば、全く何の音もしない。緑にあふれ、草花が咲き、こんな所でしばらく暮らしたら、傷んだ神経がまつすぐになりはしないだろうか。

八代の駅前で、たまらず兄に電話をかけた。「今、八代にいるの」「ヤシロでどこや」「出雲八代やんか」「えーっ、おれも行きたかつたのに……そこらへんの写真をとつてきてくれよ」兄にはこの間のウツの時に泣いて驚かせ、今はけるつとして、八代にいる、とまた驚かせてしまった。でも私のウツは出かける前も治つてなくて、行って、感激しない人になつて私を確認することになるのではないか、などとウツ特有のしょうもない思いにとらわれていた。しかしそんなのは吹きとんで、嬉々として、兄に言われるまでもなく写真をとりまくる。

三成の元谷田屋旅館では、当時若いお嫁さんであったであろうおばあさんが父を知っておられ、私の持つて行った写真にしゅうとさんを見つけ、自分の古い写真も出して見せて下さった。私の顔を見て「お父さんに似ておられる、昔に返って宮川さんに会ったような気がする、うれしい思いをさせていただいてありがとう」と言われた。私は「お元気で」としか言えなかった。背中がまがって小さく小さくなってしまうおばあさんであった。

父も二十年ほど前に母と一緒に、昔の知人をたずねる、と行っているはずだけれど、こういうたずね方はしなかったようだ。二十年前ならもっと知った人はいただろうに。阿井川の川原に母がよくいた。しかし、ここだ、と思える所は見つからず、心を残して引き上げる。鬼の舌震したふるいという巨岩と溪流の地でも、岩は動いていないから、と探したが、時間がなくて半分で引き返したためもあって見つからなかった。しかしここで父の名誉(?)を回復するものを見つけた。父の写真説明には「鬼の舌振」と書いてあったが地図や案内書などみんな「舌震」である。あまりのすごさに鬼も舌をふるわせたからこの名がついたといわれるのだから、震が正しくて父が間違つて書いたと思っていたが、かなり前に建てられた石碑には「名勝及天然紀念物鬼ノ舌振」と刻まれてあったのだ。字を知らんね、と思つてごめんなさい、である。

鬼の舌震の近くに絲原家、広島の県境に近い山奥に櫻井家があり、昔はともに松江藩から鉄師頭取の名をもらった鉄山業者であった。父は櫻井家に入りに入りにいたが、今でも櫻井といえれば別格で、私など近寄れない、と写真はあったが行くつもりはなかった。

しかし両家とも屋敷、庭が見られるようになっていた。そして別棟を建て、絲原は記念館、櫻井は屋号をとって可部屋集成館とし、それぞれ美術工芸品、民俗資料、古文書、書籍、製鉄法などが展示してあった。みんな見事なものであった。冬は雪に閉ざされるこの山奥に、今はともかく昔は、忽然として別世界があった、という感じであつただろう。

木次の駅前へさしかかった時、わがタクシーの運転手さんが「三葉タクシー！」と叫んだ。三つ葉のマークを屋根に乗せた車が停まっている。彼（一畑タクシー）が調べておいてくれて、その本社を訪ねる途中であった。父は宮川自動車を開業するまで、三葉自動車の創業時から勤めていたのだ。車を下りて三つ葉マークを眺めていたら、向こうに三葉タクシーの大看板が見えた。社名が変つてはいるが、六十六年も続いていたのである。

駅前の本社へ行つて、無線でやりとりをしている忙しい人にわけを話したら、親切

に、ここは昔と場所が違う、と地図を書いたり、大東の元営業所は公民館になつていると言い、昔のことをよく知っている人は株主総会で今日はいない、と残念がつてくれた。しかしこれで充分である。父と母が出雲へ来て家庭を持った出発点へ、この旅の最後に立つて私はもう言うことはない。

出雲の人たちはみんな親切であつた。特に奥出雲では旅行者の私たちにも「こんにちは」と笑顔を見せる。父や母が生まれ故郷の言葉を捨てて、大阪へ来てからも出雲弁をしゃべっていたわけがわかるような気がする。ちよつと遅かつたけれど行つてよかつた。

古い写真をたどるほかに観光客としてグラスボートに乗り、一畑薬師、松江城、明々庵、武家屋敷を見て塩見縄手を散策し、ハーンの旧居、記念館へも行つた。少しも疲れはなくて夢のような二日間であつた。いつもは出かけると雨に降られる私だったが、ずっとお天気はよくて、帰つた翌日大阪は梅雨入りとなつた。

七月

○日

七月に入つて、寮生が「お風呂を毎日焚いてほしい」と言つて来たが、私が「門限破りの罰の未決数を持つている人が焚くことにしたら？」と言つたことが発端となつて、揉めた。

初め、寮長が「検討します」と言つたのに、その後何も言つて来ない。どうやら、お風呂焚きはおばさんの仕事、という気があるらしい。そこで私は言つた。

「門限に限らず、いろいろ規則を破つて、私がどれだけ言つても改めないでしょ。自分達は言うことを聞かないで、私にだけ言うこと聞け、は厚かましいのじゃない。それと、あなた達は何か形にしないと解らないらしいから、私は敢えてこういう手段に出たのよ。私が無理を言っているかどうか、よく考えてちょうだい」

寮長にこう言っている時、ちょうどお風呂から二人が出て来た。十一時十五分過ぎ

である。いわば、お風呂の門限破り。この二人は長電話のあげく、お風呂もゆっくり入っていたのだった。寮長は、証拠が前を通ったから「明日寮会を開いてみんなに話します」と引き下がった。

お風呂に遅れて入る寮生に責任がない時もある。それは、早くに帰っている寮生が集団で遅い時間に入るから（多分テレビを見ているのだろう）満員となり、遅番で帰った寮生は待たなければならぬ。

とにかく彼女達は自分本位で、他の人や規則なんか頭がないようだ。夜中に屋上で洗濯をしたり、食堂でござごそやっている。「野中の一軒家に一人で住んでいるのではないのだからよく考えて」と言っているのだけれど。見つかったら「すみません」ですます。すまなかつた、という顔ではなく、見つかつて運が悪かつた、という顔だからこつちが白けてしまう。

ところで、お風呂を焚く件は寮会を開いて、ペナルティ数2以上持っている人が、週一回順番に焚くことに決まった。しかし解散してから、一人が、今までは4にならなければ罰にならなかつたのに損や、と言い出し、同調するのがいて、またあくる晩寮会が開かれた。どうするのかはみんなに任せるとして、私は「私の言いたいことを別のことにすり変えないように」と言っておいた。

結局、損得は論外で、お風呂はペナルティを持っていて人が焚き、さかのぼって、門限破りを四回しなければ罰がないのがそもそもおかしいので、これから一回毎に、遅れ具合は罰の重さを変える、という規則改正にまで発展した。一人が、損や、と言ったばかりに、一回破れば即どこかの掃除をしなければならぬことになったのである。門限を破って置いて文句は言えないはず、とはつきり言うまでもな寮生がいて、それに逆らうのはさすがになくて、全員納得した。いつになく私が強硬にがんばっているのも解ったのだろう。

十日後現在、門限その他規則破りは皆無、私の言い出したことが、おまけつきで大成功であった。しかし、それと共に、私の初めからの「怒って言うことを聞かせるよりは自発的にやるのを待つ」方針は崩れてしまった。強く出なければ歯止めがきかなかつたけれど、そっちが言うことを聞かないのならこつちも、という、いわば「眼には眼を」式は後味はよくない。

ごたごたの直後一転して、優雅にバロック音楽を聴いた。今日は寮長自ら罰でお風呂を焚く日。私は大きな顔して市民会館ホールへ行つた。市民会館へは自転車で五分くらいで行ける。

テレマン・アンサンブルという、数人の小編成のもので、会場はホール内ではなく、

ロビーの天井から斜めにかかっている大きなステンドグラスの下での演奏であった。客席もロビーに折り畳み椅子を並べたもので少ししかなく、日が暮れないうちはステンドグラスが美しく、時には空港から飛び立つジェット機が見えて、普段の音楽会の雰囲気とはかけ離れて珍しい。暮れてからは遠雷の光と音がとって代わった。しかしそれらは演奏には影響せず、聴く方も何の不満もなくて、華麗なバロックの世界に浸りこんだ。

前半が終ったところで二十分の休憩。二十分は長いなと思ったら、ドイツワインがサービスされるのであった。私はアルコール類は全くだめだけれど、この雰囲気は捨てがたい。グラスにちよつと注いでもらい、十五分かかってちびちびとやる。

故に、後半は、酒と音楽に酔いしれる結果となった。しかしこれもまた乙な味で、本来、音楽はこんな形で聴くべきものではなかったか、などと思ったりする。

ワインがあだか、終つてもみんなでアンコールを強要、最後は演奏される前に「これで終りです」の予告つきで、楽員は終るなり席を立ち、いなくなられては聴衆はもう諦めざるを得ない。

この、バロックプラスワインの音楽会は、ここで何回も開かれたらしく、終つてから馴れた感じで楽員も聴衆もワイン屋さんも、あちこちに歓談の輪を作っていた。私

は、知った人もいないし、抜け出して来ているから、大急ぎで自転車にとび乗って帰った。

出られないのだ、と無理やり諦めるよりは、時々「おばさん」の顔をやめて、ドレスアップして別の世界に潜りこんだ方が、抜け出しているという後ろめたさを差し引いても心身によいことが判った。くそ真面目にやっつけていて神経を傷めるのはもうやめよう。遊んだ後はよく働けるのだから尚のことである。ノイローゼにはならないと思っていたのが立派（？）になったので、方針を変えることにする。

八月

○日

蝉の生まれるのは年によって違いがあるようで、私がここに来てから、今年は五十八年に次いで多いようだ。五十八年度蟬作は良、六十一年度蟬作はやや良、というところ。そして暑い日中は鳴かず、朝と夕方がやかましい。「蟬時雨」なんて風流な表現は使いたくないほどのものである。

寮生は「都会の蝉はコンクリートの壁にとまって鳴くんですねぇ」と感心しているが、羽化も同じく、空蟬がいくつも壁に残っている。ある日は夕方から門柱にとまって羽化するのがいて、緑がかった色で出て来て、やがてこげ茶色の油蟬になるまでを見せてくれた。

夜がまた騒がしくボイラー室の照明灯の下に集まって来る。羽化するのにも条件があるのか、沢山いる日とない日が、はっきりしている。多い時は十匹もいて、人が

通れば驚くのか、習性か、人に向かつてぶつかるので「蟬に襲われたア」と一騒動。時には一緒に中まで入ってジイジイバタバタと飛び回り、寮生は逃げまどうのと、捕まえたのが入り乱れて大騒ぎとなる。

寮生が帰って来る度に飛びかかるので、壁にとまっているのを追っ払ったが、すぐ帰って来るので捕まえることにした。そろっと近寄れば難なくとれて、六匹を箱に入れた。これは明日、蟬取りの小学生にあげることにしよう。

○日

蟬取りの子に蟬をやったら喜ぶだろうと思ったのに、隣の児童公園にいた、網を持った子に「蟬をあげる」と言っても「いらない」とそっけない。「もらってよ」と無理やり箱を押し付けて帰った。

蟬を餌に誘拐されると困ると思ったのだろうか。無邪気な小学生よ、帰って来てよ。

○日

M子が自動車学校の卒業検定の日「暗い顔で帰れば落ちたのだから、声を掛けないでくださいね」と言った。私は「そんな、はじめから落ちることを考えないで、必ず

受かると信じてやりなさいよ」と言っただけで、暗示をかけてやろうと思ひ、荒神さんのお守りを「ほら、これを持っていけば大丈夫よ。これは靈験あらたかなんだから」と渡した。この際、なんの神様でもいいだろう。

しかしM子は「レイゲンアラタカって何ですか」と言う。「えつ靈験あらたかを知らないの」私はびっくりして、一緒にいた三人に「知ってるでしょ」と聞いてみた。が、大学卒も含めてみんな首を横に振る。新人類にとつてはもう死語なのだろうか。しかし今も入試期は神社には絵馬があふれているし、非科学的なことが全くなくなつたとも思えないが……。

とにかく私は次の言葉が出て来ない。M子はけろつとして「どういう意味なんですか」と聞いている。私は仕方なく力なく「効き目があることよ」と言つた。「なんだ、はじめからそう言つてもらえれば解つたのに」とM子。

私のがくつときたが、彼女達が私に解らない言葉を使つて話していることもあるし、お互いにもう言葉が通じなくなつてきているのかも知れない。

そして靈験あらたかではなくて、M子は検定に落ちた。スピードを出し過ぎたから、とのこと。これも考えられない。初心者はそのそと走るものと決まっているのだ。お守りも呆氣にとられて力を失つたらしい。でも、もしまたM子にそう言えば、まさ

かと思うけれど「アツケニトラレテって何？」と聞くかも知れないので、もうやめておく。

○日

ペルセウス座流星群がよく見える夜、W子と屋上に上がった。W子は翌日から盆休みなので、今夜は一時からテレビを観るのだと言っていたから、それまで星を見ようと誘ったら、二つ返事について来た。シートを敷いてクッションを枕に寝転んで見るのである。

まず北極星があれで、たとえばW子は「こんなに沢山ある星の中の一つがどうして判るの」と不思議そう。「はじめに北斗七星か、カシオペア座を見つけたら簡単」と言えば「それはどうやって」と。(うーんもう救い難いなあ)「形を覚えるのよ、そら、カシオペア座はWの形でしょ、あなたのWじゃない、あなたの星座にしたら?」「私は魚座です」「あら私も」

脱線しながら、私の知っている星座を教えた。その間にも星は流れて「アツ」「見た?」「見た」「大きかったねえ」「二十センチあった」「どういう基準で二十センチ?」「腕を伸ばして親指と小指を広げた長さ」「諒解」「アツ見た?」「見てへん」「視野を

広げよ」「どうやるの」「空全体を漠然と見るの」「できたできた」

そうやって流れ星を待ちながら、話は突然「寮はいつまであるのかなあ、寮生は出る一方だから、私も身の振り方を考えないとあかん」ということに流れた。近く三人が結婚で退寮することになったから、特にその思いが強かったのだ。

それにしても、宇宙の天体ショーを眺めながらの話にしては小さ過ぎるのではないか。あまりの差の激しさに笑いたくさえなつた。心を空に戻して、星の流れるのをひたすら待つことにする。

流れ星は未明にかけて多いとのことだったが、薄雲が広がって星の数も半減したので、私も二時に引きあげた。あさつては、さそり座のアンタレス星が月に隠れる、[〃]星食[〃]が見られることだし。

九月

○日

最近、食数が少なくて「出来ません」という日がよくある。いつも食べていた寮生が続いて退寮したこともあり、連休があつて、この間は三日連続で作らなかつた。私は休みではないから他の仕事はするけれど、料理はかなりの、それも精神的な部分が大きかつたらしく、作らなくてもよい日は気が抜けたようになる。また「ほんまにいいのやろね」と落ち着かなくもあつた。

またまた、料理そのものはいやなことは少しもないのだけれど、ない日が三日続いたら、その気の楽なのに慣れ果てて、次の日はよつこらしよという感じで「何で今日に限つてこんな数が多いのやろ」とうんざりであつた。

でもこれが当たり前のことなんだから、と諦めて久しぶりに台所に行けば、ガス台に、クモが巣を張っている。急に職場を奪われたような変な気になつて「のいて、の

いて」と追ひ払い、ガスに火をつけた。

○日

この頃私は千年以上も前からの、菅原氏、藤原氏などの系図作りに熱を上げている。もちろん私が作らなくてもちゃんとあるのだけれど、小倉百人一首の作者に歌を書き入れたりして「私なりの系図」を作ることになるわけだ。

事の発端は、出雲行きの前に叔母に、私が生まれるまでの父母の生活を聞いた時に、母の父方（菅原姓）の先祖は菅原道真だと言ったのに始まる。

私の祖父は国文学者で、二人の自分の娘に、更級日記の作者の父の菅原孝標からとつて、孝子、標子と名付けた。私は単に菅原に因んで付けられたのだろうと思っていたが、叔母の話によると、祖父は元兵庫県加西郡の生まれで、道真が太宰府に流された時に息子達もそれぞれ各地に流され、四男の淳茂は播磨の国であった。だからその子孫だといふのである。そして調べたがっていた。

今頃になって私が初めて聞いたとはおかしな話ではあるが、とりあえず手近な所で調べたら、淳茂から九代目までわかった。しかし、こちらからさかのぼる方は、過去帳は戦災で焼失しているし、枝分かれしている子孫のどれにつながるのか皆目見当が

つかない。足を使つて調べ回れば少しは進むかも知れないけれど、親の、六十年前の住み家を探すのと規模が違う。行き当たるとは思えない。知りたがっている年老いた叔母には申しわけないが、そちらの方は投げ出した。

しかし、菅原と藤原の縁組みがあり、たどつていゝうちに、百人一首の作者が数多く出て来るので、方向を変えて、歌入り（一節だけ）の系図を作ることにした。

はじめは三代くらいに家族がばらばらとあつて、それが一つの歌の作者によつてつながつた時は嬉しくて、矢印をつけたり、書き直したりして、三分の一を残すところで四枚のチラシの裏が詰まつている。

今年の初めに、来年のお正月のカルタ会には取れる数を増やそうと決めたことにも役立つからかなり熱が入つて、これは途中で投げ出せない。百人全部が終れば、もう一度白い紙に写し直して、眺めては悦に入ることになるだろう。

○日

東京にいる友人（女学校のクラスメイト）がいつも洒落た服装をしている。センスが抜群なのは確かなのだけれど、加えて布地の材質や色合いがいい。（手紙のやりとりで、お互いにこんな布地でこんな服を作りました、と端布とスタイルを入れてい

から、五百キロの距離は関係ない)

布地はこの周辺では見ることができないものだから、「一着分買って送ってよ」と言ったら、近くに在后輩と一緒に私の写真を持って行き、店の女主人と三人で相談して、これがぴったり、というのを送ってくれた。なるほどぴったりであった。

それを眺めてスタイルを考えている最中に、彼女が旅行の行き帰りに私の所に寄って泊まった。またいいのを着ている。恐る恐る「それと同じのを私も着たい」と言ったら、経済的な裁ち方を教えてくれて、布地はまた送ってくれることになった。

彼女もまた布が好きで、買いに行くのは人の物であつてもいやではないらしい。後輩とその布地屋に行った時は「ミヤさん(私のこと)をここに連れて来てやりたい」と言っていたのだそうだ。しかし私は「そこが東京でよかつたわ。見境なくほしくなるに決まっているから、見ない方が身のためよ」と笑った。幸か不幸か、池田石橋には気に入った店がなくて助かっている。

最近になって、池田にいい手芸の店があるのを知った。ここは布地の専門店ではないから、入り浸って経済ピンチに陥ることはない。洋服を縫うための付属品を揃えるのに不便のない店で、バッグやその他手製の小物が沢山ぶら下がっていて、時々行つては目を楽しませている。

この店の存在は、実はその友人に教えてもらったのだ。が一度は見つからなかった。彼女が来た時に二人で行って見たら、そのあたりは全部なくなって、バス、タクシーのターミナルになっていた。

ある日自転車で走っていたら、前にそのあたりにあった薬局が新しいビルにあるのが見えた。急ブレーキをかけて薬局に入り「前に近くにあった手芸用品店はどくなつたのでしょうか」と聞きかけたら皆まで言わず「お隣ですよ」と言う。えっと出てみたら、あつたんですねえ。大きな店で（何でこれが目に入らなかつたのか）私は構えを見上げて感激した。

すぐ彼女に「見つけたよー」と知らせ、今は、選んでもらった布とお揃いの布を積み、付属品はあの店で買って、と縫う暇のできるのを待っている。

十月

○日

メニユー表の欠食のサインが長行列を作る日が続いたり、寮生が「家に帰ります」とか「旅行です」と外泊を告げに来て、私はようやく連休があるのを知る。もう普通の休みとは関係がないのに慣れたか。

以前は出かける寮生達に「私を置いてみんな行くのねー」とわめいていたが、今はもう淡々と「楽しんでいらっしやい」と見送るだけである。寮生の方は「お土産買ってきまーす」とか「飛行機に乗るから、落ちたらこの指輪を覚えて探しに来て」とか、それぞれのはしゃぎ方でにぎやかに出て行く。

顔ぶれは入れ替わったが、六人しか残っていない日が二日続いたので、私は前の晩に一人一人に朝出る時間を聞いて回った。幸い二日とも早出がなかったので、目覚ましはかけず寝坊を決めこんだ。朝寝の一時間は貴重でもうけた気分になる。朝のぼた

ばたとした慌ただしい気配はなく、夜も遅くにお風呂を焚いてまとまって入り、短時間ですんだ。

旅の者が帰って来たらにわかには活気を取り戻し、ここは世間とは反対に、人数が少ない時は休日で、多くの顔に出会う時が休みでない日である。

○日

秋の京都へ「ターナー展」を観に行った。ターナーという画家のことはよく知らなかったけれど、友人からそのオープニングレセプションに招待されると聞いて、一度あのテープカットの後の空いた展覧会をただで観るといふのをやってみたい、というさもし根性で無理やり連れてもらったのだ。

行ってみれば、美術館長は病気のためお休みで、もったいぶったテープカットはなくて、入場者は多く、重なり合って見るいつもの見方と変りがなかった。

しかし入るなり私はおのが不明を恥じた。一見平凡な風景画にも、何やら動く気配のものがあるというか、語りかけられるものがあつて引きこまれた。こんな感じ方は久しぶりであつた。先日見たマネ展がよくなく、これはもう私は感じない人間になつてしまったのかと絶望しかかっていたのも救つてもらえた。

見終つても、出ようとして出られない雰囲気があり、また一番気になった絵を見に戻つてようやく不思議のターナーさんと別れた。

最近、私の雨女は返上しつつあり、この日の京都もにわか雨程度でちよつとぬれただけであつた。

○日

四回目の栗ご飯の日。去年までは食堂でみんなと一緒にわいわい言いながら栗むきをしたのだけれど、一人五個ずつとノルマを課しても、いつも二、三人むかないのがある。危なつかしい手つきが見ていられなくて、私から「もうやめて」と言うのは別にして、ずるいのがいるのだ。今年は私の精神状態がよくないから、腹の立つことに近寄らない方がよい、とメニューを変更することを考えたが、やつぱり旬のものは食べたいから栗ご飯はそのままにして、栗むきは一人でやることにした。頼まなけりや、ずるをするのはいなくて、腹を立てることもない、という消極法である。

しかし、五十個のうち四十個をむいたところで指が痛くなつたので、残りは食堂に置いてきた。まあこれで、ずるでなくてもむかないのがあるから気はすむ。考えてみれば私も変な性分。

これにちよつと似たことで、私はいま、むきになってやっていることがある。それは社宅の溝掃除。

旧館が社宅になって、会社の人が入ってからはクスノキの落葉掃きから解放された、と喜んでいたが、掃除がしてあったのはほんの初めだけであった。私はしばらくは落葉の積もつていくのを見ていたが、町内会で公園の掃除をする日があり、そのままだと町内の人に迷惑をかけることになるから、前の日に私が片付けた。社宅の奥さんは働きに出ているらしく、週日は留守である。

その溝には大事な排水溝が中央にあつて、そこが詰まると大雨が降れば道にあふれる。社宅の奥さんに、週に一回でいいから掃除をしてください、と言えばいいのだけれど、初めて行った時に玄関横の小窓から応対されていやな気分がしたから、私は会いたくないのだ。

寮母などしていたら、そういう待遇を受けても仕方がないのかも知れないけれど、近寄りたくない。

たまたま関西電力が、高圧線にクスノキの枝が触れるようになったから切らせてほしい、と言つて来たので総務に電話をしてそれを伝え、ついでに溝掃除のことを言つたら、総務氏は、社宅の主に伝えると言われた。しかし変りない。雨の前にまた私が

掃いた。

食堂で仲良しの寮生にばやいた。

「掃除をしてくださいと言いは行きたくないし」

「そりやおばさん、やっぱり言うべきです」

「会いたくないのよ」

「手紙か電話で言えば？」

「それもいややしね」

「それならいやみで、休みの日に寮生でわいわい言いながらやりましょか」

「いやみととられなかったらどうするの。今までも私がやるまで放っておく人よ」

以来、私はせっせと住宅の溝掃除をしている。言いに行くよりは、である。

部屋にじっとしているより体を動かす方が健康的だし、外の空気も吸えるし、そう、クスノキは落ちて来る葉も小枝もいい香りがして、気分がよいから鼻歌まじりでやれる。

なんてうそ。実は、何でよそんちの掃除を私がせんならんよ、と思いながらやっている。

十一月

○日

新聞に「ヒロインを造花で表現」展の紹介があった。椿姫、カルメン、葵の上、サロメなど激しく生きた二十五人の女を表わしたとのことで、Rさんを誘って見に行く。先頃私は赤地に黒の水玉のデシンに黒のレースをあしらったワンピースを作り、それに「カルメン」と名付けた。そして次は「サロメ」を作ろうと布を探しているところであったし、作者は私と似たところがあるような気がして「サロメ」をどう表現するのか興味があった。

しかし、人の心はさまざまだと思わせ、表面的なものをくぐり抜けてつきつめたらこうなるのかも知れないと考えさせられる、私のイメージとは違うものが多かった。私の「サロメ」は華やかな七色のベールのイメージから、外へも内へも一步も出ない。造花の方は、こじんまりとした白の葉とピンクの朝顔ような花一輪で、清楚と言

えるほどのものであった。

でも人間には気持ちがあり、行動があり、その行動も必ずしも気持ちの表われであるとはあるとは限らなくて、それを形や色で表現するのはむづかしい。それをするのがまた複雑な人間であるから、これはもう「違い」とは言えないのかも知れない。あなたはそう思うの、私はこうよ、であっさり片付けた方がよさそうである。

Rさんが私に「この花の中でどれが好き」と聞くから「あれとあれ」と言ったら「暗いなあ」と。Rさんの私に対するイメージもまた本人とぴたりしていないようだ。いつか「ミヤさんて、つき合ってみたら普通の人やった」と言ったことがあった。一体どう思ってたんや。私はごくごく普通の人やと思ってるけど。

ともあれ美しいものを見て楽しくないはずはない。フランス調の喫茶店でお茶を飲んで、おしゃべりも楽しんだ。そのうち「沢山の造花を置くのには広い部屋がいるし、花の上にはほこりがのつたら困るなあ」と現実的な話になって、私は仕事があるのを思い出し、寮に帰った。

○日

ワンピースを買い替えた。今までののは単純なものだったから、縦書きができて、葉書

も使え、漢字変換も熟語でできるのが安くで出たのでとびついた。

しかしこれがカシコイ頭を持っていて、なかなか使いこなせない。それまでは「ワープロ講習会」なんて必要あるのかなあと思っていたが、私も行きたくなくなった。それでも高い講習料を節約しようと挑戦しているけれど、今のところまだ負けている。一旦白旗掲げて頭を休め、元気が出たらやつつけてやるから、と思っている。

負けてるとかやつつけると言うのは、対話形式になっっているからであるようだ。例えば、出した文字を消すために『消去』のキーを押せば『消しますか?』の文字が出て『はい』のキーを押さないと消えない。はじめのうちは素直に『はい』を押していたけれど、ミスが重なってくるとむかついて「消したいから押し込んでしょ」とか「はよ消しなさいよ」と憎まれ口をきくようになって、意志のある相手に対しているような気分になってくるのである。

奮闘中に二男が来たので「貸すからマスターして私に教えておくれ」と言ったけれど「頭の体操になるから自分でやりなさい」とつれなく言っ、古い方を持って帰ってしまった。売ろうと思っていたものを。

年に一度の、池田市の文化財を公開する日なので、Rさんで行った。ダイエーで駅弁を買い、Rさん宅へ行って自転車を置いて、バスで伏尾の久安寺へ。

境内でお弁当を食べながら紅葉を眺め、半袖でもよさそうな小春日和、これでもう満足という気分であった。

しかし予定は詰まっている。国の重要文化財などを見せてもらってRさん宅に帰り、残り五か所は自転車で回ることにする。文化財を見ることが普段は通らない所へも入りこむことになり池田の町が少し見えた。

池田はかなり古くて、いろんなものが雑多に詰まっているという印象を受けた。

神社の拜殿に、大きなステンドグラスが一對にしてはめてある。模様は鶴か鳳凰でおかしくはないけれど、奇妙な感じはした。これが池田の象徴かも知れない。

私は池田に三年十か月住んでいるけれど、何かまだよくわからなくて、わが町、という気はしない。人の気質はもうひとつで、特に商売する人が、らしくない。私が行くのは布地屋が多いが、A屋は愛想はいいけれど、物差しが短いらしい。五十センチ買ったなら四十九センチしかなく、三メートルなら五センチは足りない。N屋で「この裏地をコート分ください」と言ったら「そんな沢山無い」と怒られた。K屋で「もう少し腰の弱い布がほしい」と言えば「うちでは扱ってない」とけんもほろろであった。

二軒で言われて、これはひよつとして、そう言わせるものが私にあるのか、と悲しくなつて考えこんでいたら、K屋は別の布を出してきた。扱っていないと言いながらあるやありませんか。

あとで聞けばK屋は機嫌のよい時と悪い時があるそう。でも商売人の態度としてはどうだろうか。A屋は五十センチ買いに行つたのだから五十三センチ切れとは言わない、五十センチきつちりくればいい。N屋はおだやかに「コートには足りません」と言えばいい。私なら申しわけありませんがをつける。本屋も「そんな本ここで探さばつても無理ですわ。大阪へ行かはらんと」と言つた。これも「置いてなくてすみません」ではないかしら。

とにかくこの頃一般的に商売する人がそうなのか、池田の土地柄か、たまたま私の行く先に限るのか。私はいつも後味の悪い思いを抱いて帰る。

住めば都、になるのはいつのことだろう。

十二月

○日

大根を買いに出たつもりが、隣の毛糸屋さんの軒先にぶら下がっているモヘアのセーターに目がいつて、かなり複雑な模様編みだけれど編みたくなり、衝動買いをしてしまった。大根百円。毛糸三千六百円。

しかし、毛糸を買えば編み方のパンフレットをくれたが、帰りぎわの店主の言った「これは好評で、もう何人も同じのを編まはりました」を聞いたら、私はもう編みたくなくなってしまった。同じもの、がいやなのである。難儀な性分。で仕方なく別の模様で編み始めたが、一玉編んだところで進まなくなり、ほどいてしまった。続かないというのも難儀。

でも毛糸がごろごろしているのは気になるから、方針を変えてマーガレットを編むことにした。模様はなしで、身頃はガーター編み、袖は七宝編みである。

これは今のところ順調に進んでいる。眼鏡なしでも編めるし、途中で置いても、模様のどこやったかいな、と考えなくてよいからで、もう、私は目数を数えたり減らしたり増やしたりするのはむづかしい年頃なのかも知れない。

○日

寮の塀の向こうの駐車場に露出狂の男が現れた。ここを女子寮と知ってやって来て、懐中電灯で各部屋の窓に合図を送る。女の子に注目してもらいたいらしいが、寒いのご苦労さん、である。

寮生達が騒ぐので「知らん顔しときなさい。きゃあきゃあ言ったら喜ばすことにならでしよ」と言ったのだけれど「塀を越えて来たらどうしよう、おばさん、はよおまわりさん呼んで」と泣かんばかりに言うので、とうとう派出所に電話をかけた。

しかし前によく男が入りこんだ時に警察に電話をしても、いつも後手となるので、直接近所の派出所に連絡する、という申し合わせができていたのに徹底していなくて、改めて状況を聞かれ私の名前や年まで聞かれてるうちに男は帰ってしまった。今度は私のわめく番。「ほらね、もう電話はしないからね、みんなも変なのが出来ても相手にしなさんな」

そして一週間後、また同じ男が現れた。私は「ほつときなさい」と言っていたが、寮生達は口々に怒鳴り出した。男に向かつて、である。その言葉たるやびっくり仰天、あんまりものすごくて書くのとはばかられる。

その日は退寮するF子の送別会を石橋でやってきて、全員お酒が入っていたのだ。それにしても若い女の子がそんな言葉を知っていて、使えるとは……。その上三人が駆け下りてきて「捕まえたいから行かせて」と言う。私はあきれついでに「まあそれだけ勢いがよかつたらいいでしょう」と出してやった。

しかし、男は怒鳴られて恐れをなしたか、イメージがこわれたか、既に姿を消していた。これから後ももう来ないだろう。

それでよかつたのかも知れないけれど、私もイメージがこわれたわ。この前はか細い声を出しておいて、ころつと変つてもものすごいのだから。

お酒の飲めない私にはそういう気分は解らない。

○日

大フィル合唱団で歌っていた友人が東京に引越し、年末のベートーベン第九はどうなるのと言っているうちに日は過ぎて、遂に九年続いた恒例大行事は今年で途切れ

た。

それにしても、同じものを九回も聴いて、よくもまあ、と我ながらあきれている。でもいつか、歌っている人に「飽きないの」と聞き「聴く方はどうやねん」と反問されて「飽きへんもんやねえ」と笑い合った。何度聴いても同じようには聴いていないのであった。きつと歌う人も楽団員も毎回同じ演奏ではないのだろう。

私の聴くのは大阪フィルハーモニーオーケストラで、大抵朝比奈隆の指揮によるものだけれど、指揮者の解釈によつて演奏は変り、朝比奈さんの第九は、おそらく世界で一番時間が長いだろうと言われている。

友人は「団員の肺活量がどれほどあると思てるのか」と嘆くから「プロ並みと思てはるのでしょ」と励ました。が、ゆっくりだと目が回るそうである。その人だつて、一緒に歌ってみれば、私の三倍以上も息が長い。

一度同じオーケストラの第九を小沢征爾の指揮で聴いた。指揮者が変われば音楽もびつくりするほど変る。特にこの時は、その年のはじめに亡くなった元コンサートマスターの安田さんに、三楽章が捧げられた。安田さんは穏やかな人で、聴衆にも人気があり、ステージに現れると、指揮者かと錯覚するほどの大拍手が起るのであった。(後任の若い人には拍手をしない。こちらへんは大阪人の現金なところ)

安田さんとは私がYMCAに通っている時、市電の天満停留所で一緒になり話をしたことがあった。その頃の安田さんはオーケストラに入りたてで、第一バイオリンの後ろの方で弾いておられた。私が子供を家に置いて出られるようになり、久しぶりに大フィルを聴きに行つて、安田さんはおられるかしらと後ろから探したら、ずっと前の方で、それもコンサートマスターの席であつた。

ある朝突然、事故で亡くなられた。

考えてみたら、年末の第九は、わが大阪のオーケストラで、コーラスの昔の仲間が私の分も歌つてくれていると思ひ、時々打ち上げ会に紛れこんだから別の知り合いもいて、最後に螢の光を歌つて別れるという身内的な気楽さがあつた。世界で一、二と言われるオーケストラを聴きに行くのとは別の聴き方をしている。

朝比奈さんは日本で最年長の指揮者で、時々ドクターストップがかかるようになったから、なるべく多く聴いておきたい。今年は仕方ないからあきらめて、部屋の中で第九を聴くことにする。

一月、私のお正月

一日

前夜はO子と二人。遅くに帰ったO子が銭湯に行くと言うので「大晦日まで働いたのだから、二人で贅沢しようよ」とお風呂を焚いた。O子は「たっぷりでなくても、寝転んでお湯につかればいいのだから、半分でもいけるでしょう」と言う。私は「贅沢をするのだから一杯入れましょ」と言っただけで、まあいつもより少なめで止めた。それでも六人が入れる大きさだから泳げそうではある。

O子は「明日早くて会えませんか」と改まった挨拶をして引きあげた。私はラジオから聞こえる除夜の鐘を八つほど聞いたところでお風呂に入った。

一年が終ったから、新しい年になったから、といって特別の感慨はない。現実的に、しばらく一人の暮らしになるなあという解放感に浸っていた。これから百時間は私だけのもの。これも贅沢なことと言える。ただし昼間外出してもいいが夜はいること、

となつてゐる。私はどこへも出ないことにした。その時間をまかなう用意はある。

朝は寝られるだけ寝て起きたところへ長男から電話がかかり、お雑煮を食べに来るとのこと。彼は武田の家風に従つて、元日は白味噌仕立てでなければならぬ。中に大根と人参が入る。私は実家式で、お澄ましに削り鰹と海苔と葱をのせるもの。二人で二様のお雑煮である。

午後から二男が来る予定なので待つていたが「風邪気味で出たくない」と言つて来た。長男曰く「あいつも年やなあ」。

そこで、お節とお雑煮の出前をすることに決めた。一つは夜の、ウィーンからのニューイヤークンサートをテレビで見たいためでもある。食堂に行けば見られるけれど、寒いからラジオで聴くことにしていたのだ。

二男とは久しぶりの対面であった。秋に仕事で怪我をした時も見舞つてやれなかつたし、声もしばらく聞いていなかった。顔を見てほっとする。やっぱりお正月があつてよかった。

二日

終日百人一首の勉強。十八日にコーラスOBの新年会があり、その二次会で催され

るカルタ会に向けて、頭の特訓である。もうちよつと日が近づいてからの方が忘れなくていいのだけれど、暮に買った「百人一首の謎をとく」本が面白くて、それによって覚えたものもあるから、引き続き本格的にやり始めた。

誰もいないため遠慮なくラジオやテープやCDを大音響で鳴らしながらで、全くのわが世界。一日のニューイヤークンサートの録音テープもある。指揮をしたカラヤンは演奏の合間に挨拶をし「ピース、ピース、ワンスモア、ピース」で終えた。実はドイツ語と英語で、私にはそれしか解らなかつたのだが、世界に向けて、平和を、と呼びかけたカラヤンがたのもしかった。「もつと言って！」という感じである。

洋楽を聴きながら和歌の勉強、これも平和なればこそ。

三日

頭を休めて体を動かそうと池田まで自転車で走ることにする。レコード屋と本屋のハシゴをし、CDと「かな」のお手本を買って帰った。CDを聴きながら書き初めをする。

あらさらむ このよのほかの おもひてに

いまひとたひの あふこともかな

(これは私の心境)

はなのいろは うつりにけりな いたつらに

わかみよにふる なかめせしまに

(これもおこがましいけどまあ心境)

こぬひとを まつほのうらの ゆふなきに

やくやもしほの みもこかれつつ

(定家に敬意を表して)

このたひは ぬさもとりあへず たむけやま

もみしのにしき かみのまにまに

(菅家が交野で詠んだといわれるから、

菅原でもあるし、交野の元住人として)

その後、覚えにくい歌を小さな色紙に書いて部屋の中に貼る。トイレの中にも貼った。色があふれて華やかでもある。幼稚園のようでもある。

四日

午後からぼちぼちと寮生が帰って来るが、食事はなしで、お風呂だけ焚けばよい。

気がつけば、私は三日間お風呂に入っていない。首までつかっていたものは、いにしえの女と男の思いをしのばせた言葉の数々に、であった。

結局、カルタの取り札を見て上の句を言えるのが七十五枚に増えた。これを忘れないうようにするのがまた一苦勞であるけれど、毎日おさらいをして、このままを保つようにがんばろう。

六日

部屋は暖かくしてあるのに手足が冷たくて気分が悪い。夕方から熱が出て起きられなくなつた。お風呂はW子に頼んでひたすら眠る。あんまり頭をいためつけたから、配線がショートして発火したか。古びた頭でも、その気になればなんとかなるやんか、と思つていたが、やっぱり、無理は確実にたたる。